

## 特性シャイネスとシャイであることの自己報告, 困った経験, ビッグ・ファイブとの関係

高柳 真人<sup>1)</sup> 藤生 英行<sup>2)</sup>

### Relationship among Trait Shyness, Self-report “I am shy” , Troubles, and the “Big Five”

Masato TAKAYANAGI Hideyuki FUJIIU

#### Abstract

The purpose of this study was to consider the relationship between trait shyness and (1) the self-report that “I am shy” ,(2)troubles caused by shyness, and (3) the “Big Five”, which is the Five Factor Model in personality psychology. The survey was conducted to 195 college students, and made use of 189 (96.9%) respondents who agreed to be co-operators with the survey. The result was; (1)students whose self-report was “I am shy” showed higher scores in the trait shyness scale, so, the self-report “I am shy” seemed to be useful as a predictor of shyness, (2) higher scores reflected in the trait shyness scale indicated they experienced more troubles caused by shyness in their life, (3) trait shyness was explained by extraversion negatively , attachment negatively, and emotionality positively. Restrained behavior, a component of trait shyness, was explained by extraversion negatively and attachment negatively. Social anxiety, another component of trait shyness, was explained by extraversion negatively and emotionality positively.

Key words : trait shyness; self-concept; trouble; “Big Five”; Five Factor Model(FFM)

## 〔問題と目的〕

筆者は、これまで、教職遂行過程では対人行動が重要な役割を果たすという認識のもと、対人不安や行動抑制(対人消極性)といった対人行動と関連した特徴から説明されることも多い(例えば, Buss, 1980; Cheek & Buss, 1981; Jones & Russell, 1982; Leary, 1986; Pilkonis, 1977; 菅原, 1998) シャイネスに注目し, シャイな教師の特徴や教職遂行について検討してきた(例えば, 高柳, 2006a; 高柳, 2006b; 高柳ら, 1998; 高柳ら, 2005)。シャイな教師が教職遂行過程でどのような経験をしているのか, シャイな教師が教師としてどのように成長していくのかということに, とりわけ関心を持っているが, 検討すべき課題はまだ多い。本研究では, シャイな教師の問題を, もう少し広い枠組みで考えるべく, シャイな人(特性シャイネス)に焦点を当て, 自分をシャイだと思っている人は実際にシャイなのか(自己報告と特性シャイネスの関係), シャイな人はどのような経験(困った経験)をしやすいのか, そもそもシャイな人というのはどのような人なのか(性格特性論の立場からの特性シャイネスの解明)ということを検討する。ここで得られた知見は, シャイな教師に関する検討を進めていく際, 定義の検討, 実態解明, 行動予測等といった諸課題の解明につながる知見を提供するものと考えられる。

Crozier (1990) も指摘するように, シャイ, シャイネスという語は, 人を記述する場合(「彼はシャイである」)にも, ある状況下での反応を記述する場合(「某氏を訪ねた時, どうして君はシャイだったの?」)にも利用され, 前者を特性シャイネス(trait shyness), 後者を状態シャイネス(state shyness)という。Crozier (1979) の報告以来, 性格(人格)特性としての特性シャイネス(因子)が存在するという考えは支持されていると考えてよいだろう(他にも, 例えば, 相川, 1991;

Jones, Briggs & Smith, 1986)。Zimbardo (1977) は, シャイネスが, 万人共通の体験であること, その一方で, その体験から自分をシャイだと考える人もいれば, 赤面したり, 不安でときどきしても自分にシャイというラベルを貼らない人もいることを報告している。このことは, 多くの人がシャイネス反応(状態シャイネス)を経験すること, しかし, すべての人が, 特性シャイネスの立場に立って, 自分をシャイ(な人)だと規定するとは限らないことを示している(同様の指摘は, 例えば, Hill, 1989; Ishiyama, 1984; 岸本, 2000)。従って, シャイ, シャイネスという語を用いる際には, 状態シャイネス, 特性シャイネスのいずれを想定しているのかということ意識しておく必要があるといえよう。とはいえ, 岸本(2000)が, 「自分自身をシャイであると報告した個人の78.8%は, 『ときどき, 週に一度未満』かそれより多くシャイネスを経験し, 「シャイではないと報告した個人の89.2%が, 『ときどき, 週に一度未満』かそれよりシャイネス経験が少ない」と報告するように, シャイな人とは, (状態)シャイネスを経験しやすい人と考えられる。

Zimbardo (1977) は, その反応が多様であることから, シャイネスを単純に定義することは難しいと考え, 「あなたがもしシャイだと思ったら, あなたはシャイなのです」という自己報告型の定義を採用している。筆者も, これまで, Zimbardo (1977) に倣って, その教師がシャイ(な人)であるかどうかを, 自己報告(「自分はシャイだと思う」)を利用して判断してきた。教師がシャイ(な人)であるかどうかを判断するには, 特性シャイネスを測定する尺度(例えば, 相川(1991)の「特性シャイネス尺度」; 鈴木ら(1997)の「早稲田シャイネス尺度」)を適用し, その高得点者をシャイな人と判断する手続きを踏むこと(例えば, 石田, 2003)が標準的であり, 妥当なものと考えられるが, 自分はシャイであるとする自己報告にも, それを裏付ける経験が

あり, 一定の妥当性があるという報告もある(例えば, Alm & Foldi, 2008 ; Cheek & Melchior, 1990 ; Fatis, 1983 ; 岸本, 1999)。今回, 自己報告の妥当性を, 「特性シャイネス尺度」(相川, 1991) 得点との関連を分析することを通して検討してみたい。また, 自分をシャイだと思っている人, 特性シャイネス得点の高い人がどのような経験をしているのか, 今回は, 困っている経験に焦点を当てて, 検討を加えることとする。

さらに, シャイネスを喚起されやすいシャイな人とは, そもそもどのような人なのかということ, ビッグ・ファイブとの関連から検討しておきたい。ビッグ・ファイブとは, 「自己報告や観察者評定で測定されるような性格傾向については5つの広範な性格特性概念で十分に記述できるとする」(林, 2002) 説, 「5つの特性因子によってパーソナリティを記述していこうとするモデル」(大野木, 2004)であり, 今日, 「多くの支持を受けている」(林, 2002)とされている(同様の主張は, 例えば, 藤島ら, 2005 ; 岸・藤田, 2004)。5つの特性因子は, 研究者により名称は多少異なるものの, 「名称の不統一に比べると内容は混乱していない」(林, 2002)とされており, 「外向性」, 「愛着性(協調性)」, 「統制性(勤勉性)」, 「情動性(情緒安定性, 情緒不安定性, 神経症傾向)」, 「遊戯性(開放性, 知性)」の5つが提唱されている。これまでも, シャイネスと社交性(例えば, Buruch et al., 1989 ; Cheek & Buss, 1981 ; Eisenberg et al., 1995 ; Pilkonis, 1977), 外向性(例えば, Jones et al., 1986 ; Pilkonis, 1977a), 主張性(例えば, Jones et al., 1986)といった対人行動と関連した性格特性との関係が検討され, いずれも負の相関関係があることが報告されているが, ビッグ・ファイブを利用した, より包括的な特性シャイネスの検討は, 十分にはなされていないといえよう。2013年11月27日に, PsycINFO (APA) で検索したところ, shynessとBig Five尺度の関連を直接検討し

た文献は2件(Bratko et al., 2002 ; Gerbino et al., 2000)のみであった。また, 林(2002)が「日本ではビッグ・ファイブはあまり導入されていない」という通り, 同じ日に行われた, CiNii (国立情報学研究所)による検索でも, 該当する文献は見出されなかった。尚, 16-18歳の高校生を対象としたBratko et al. (2002)の研究では, 両者の関係は, 複雑なパターンを示すとされ, 14-21歳の青年を対象としたGerbino et al. (2000)の研究では, シャイネスは, 女性の場合, 外向性, 協調性, 情動性, 開放性と関連し, 男性では, 外向性, 協調性, 開放性と関連していることが報告されている。こうした状況から, わが国の成人を対象とし, シャイな人とはいかなる人なのかということ, ビッグ・ファイブの枠組みで包括的に説明する試みにも意義が認められると考えられる。本研究では, 「日本人固有の性格特性を考慮して独自に作成された」(藤島ら, 2005) FFPQ (Five Factor Personality Questionnaire) を原尺度とし, 項目数が絞られ, 回答者の負担軽減がなされていることなどを考慮し, ビッグ・ファイブ尺度として, 藤島ら(2005)の開発したFFPQ-50 (Five Factor Personality Questionnaire-50) を利用する。

以上のように, 本研究では, 自己報告(「自分はシャイだと思う」)を利用して, その人がシャイ(な人)であると判断してよいか, 自己報告と特性シャイネスとの関連を, 性差の分析も含めて検討することを第1の目的とする。また, 自分をシャイであると思っている人, 及び, 特性シャイネス得点の高い人は, 実際に, シャイであるため困っているのかということ, 性差の分析も含めて検討することを第2の目的とする。次いで, ビッグ・ファイブ(Big Five)の枠組みから, 特性シャイネスがどのように説明されるのかということを検討することを通し, シャイな人とはどのような人なのかということを考察することを第3の目的とする。

## 〔方法〕

### 1. 調査対象と手続き

2011年11月から2012年1月にかけて、教職科目を受講する関西の私立大学の3,4年生195名(男性101名,女性94名)を対象に、「シャイネスに関する調査」を実施した。授業時間を利用して、研究の目的や回答の扱いについて口頭で説明した後、調査用紙を配布、回収した。調査は無記名で実施され、回答したくない質問には回答しなくてもよいこと、プライバシーは保護されること、質問紙に付記された「あなたの回答を研究に利用してよいですか」という問いに、「よい」と回答した者の回答のみ利用することが説明された。本研究では、利用して「よい」と回答した189名(195名の96.9%;男性97名,女性92名)の回答を分析対象とした。但し、各分析は、該当項目に完全に回答している回答のみを対象に行った。

### 2. 質問紙の構成

質問紙は、対象者の性別を問う質問(Q1)、「自分をシャイだと思うか」という問いに、「思う」「思わない」から選択して回答する形式の質問(Q2)、「シャイであるため困った経験がありますか」という問いに対し、「これまで困った経験がある」「現在も困っている」「困った経験はない」から選択して回答する形式の質問(Q3)と、以下の、特性シャイネス、ビッグ・ファイブに関する尺度で構成した。尚、調査対象者が回答する「シャイ」という語に対する共通理解を図るため、相川(1991)のコメントを参考に、「シャイな人とは、内気、恥ずかしがりや、引っ込み思案、てれや、はにかみやのこととします」という注をQ2に添えた。

①特性シャイネス尺度：相川(1991)が作成した特性シャイネスを測定する尺度(16項目)を使用した。回答形式は、「全くあてはまらない(1)」から「よくあてはまる(5)」までの5件法である。

②5因子性格検査：藤島ら(2005)が開発した5因子性格検査短縮版(FFPQ-50)(50項目)を使用した。回答形式は、「全くちがう(1)」から「全くそうだ(5)」までの5件法である。

## 〔結果と考察〕

### 1. 自分をシャイだと思う／思わないことと特性シャイネスの関係

自分をシャイだと思う者は、回答者全体(189名)の53.4%(101名)であった(Table 1)。教師を目指して教職科目を履修する学生の半数以上が、自分をシャイだと考えていることが示された。 $\chi^2$ 検定を行った結果、出現頻度に性差は認められなかった( $\chi^2(1)=.852$ , *n.s.*; *df*=1の効果量 $\phi=.067$ )。

シャイネス尺度全16項目について、逆転項目の処理を行い、確認的な意味で、因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。固有値スクリープロットの減衰状況から、2因子構造であることが示された。両因子に、0.5以上の高い因子負荷量をとともに示す項目(「3私は引っ込み思案である」、及び、「4私は人の集まる場所ではいつも、後ろの方に引っ込んでいる」)を削除し、再度、因子分析を繰り返した結果をTable 2に示す。第1因子は、「私は初めての場面でも、すぐにうちとけられる」、「私は誰とでもよく話す」、「私は新しい友人がすぐできる」、「私は知らない人とも平気で話ができる」、「私は自分から話し始める」などの7項目からなり、対人行動が抑制的、消極的であることに関連した項目からなり、「行動抑制」因子と命名できると考えられた。第2因子は、「人前に出ると気が動

Table 1  
自分をシャイだと思う者の割合 n=189

|    | シャイだと思う    | シャイだと思わない | 合計          |
|----|------------|-----------|-------------|
| 男性 | 55(56.7%)  | 42(43.3%) | 97(100.0%)  |
| 女性 | 46(50.0%)  | 46(50.0%) | 92(100.0%)  |
| 合計 | 101(53.4%) | 88(46.6%) | 189(100.0%) |

Table 2 特性シャイネス尺度の因子分析（主因子法，バリマックス回転）の結果

| 項 目                       | 第 1 因子 | 第 2 因子 | 共通性  |
|---------------------------|--------|--------|------|
| 11私は初めての場面でも，すぐにうちとけられる   | .830   | .272   | .762 |
| 8 私は誰とでもよく話す              | .814   | .195   | .701 |
| 1 私は新しい友人がすぐできる           | .771   | .175   | .625 |
| 15私は知らない人とでも平気で話ができる      | .720   | .308   | .614 |
| 13私は自分から話し始める方である         | .668   | .236   | .502 |
| 9 私は自分から進んで友達を作ることが少ない    | .638   | .242   | .466 |
| 5 私は人と広くつきあうのが好きである       | .627   | .074   | .398 |
| 12私は人前（ひとまえ）に出ると気が動転してしまう | .135   | .775   | .619 |
| 16私は人前（ひとまえ）で話すのは気がひける    | .370   | .715   | .648 |
| 14私は人目（ひとめ）に立つようなことは好まない  | .304   | .640   | .502 |
| 2 私は人がいるところでは気おくれしてしまう    | .373   | .603   | .503 |
| 7 私は内気（うちき）である            | .431   | .591   | .535 |
| 6 私は他人の前では，気が散って考えがまとまらない | .077   | .581   | .344 |
| 10私は，はにかみやである             | .066   | .580   | .340 |
| 固 有 値                     | 6.49   | 1.97   |      |
| 寄 与 率 (%)                 | 46.4   | 14.1   |      |
| 累積寄与率 (%)                 | 46.4   | 60.4   |      |
| 各項目群の信頼性係数( $\alpha$ )    | .901   | .859   |      |

転してしまう」，「人前で話すのは気がひける」，「人目に立つようなことは好まない」，「私は内気である」，「人がいるところでは気おくれしてしまう」などの7項目からなり，人前で気後れがしたり，動揺することに関連した項目からなり，「対人不安」因子と命名できると考えられた。これら2因子は，相川（1991）が尺度作成時に援用して用いた「社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群」（Leary, 1986）というシャイネスの定義を反映しているものといえよう。相川（1991）も，因子分析の結果，2因子が抽出されたことを報告しており，同様の結果となった。第1因子の $\alpha$ 係数は.901，第2因子の $\alpha$ 係数は.859であり，内的整合性は十分に保たれている。また，16項目全体の $\alpha$ 係数は.923，第1因子の寄与率が46.4%であることから，単次元の尺度としても利用できると考えられる。菅原（1998）は，「対人不安傾向」，「対人消極傾向」（菅原の利用した測定尺度は相川（1991）の「行動抑制」の項目と同様の項目からなり，「行動抑制」と同様

の概念と考えてよいと思われる）をシャイネスの主要な2つの要素であると考え，両者の関係を検討した結果，異なる特性として抽出可能であることを報告している。そのことを踏まえ，以下の分析では，因子分析で得られた「行動抑制」因子7項目，「対人不安」因子7項目を下位尺度とし，特性シャイネス尺度（16項目全体）も含めた3尺度と他の要因との関連を検討することとする。Table 3に各尺度の平均得点を示す。 $t$ 検定を行い，性差を検討したが，いずれの尺度においても有意差は認められなかった（Table 3）。これまで，シャイネス尺度得点の性差については，早稲田シャイネス尺度の情動的側面で女性が高いという報告もあるが（三輪ら，1999），有意差は認められないという報告も多く（特性シャイネス尺度を用いた研究では，例えば，相川，1991；早稲田シャイネス尺度を用いた研究では，例えば，鈴木ら，1997；風間，2009；Revised Cheek and Buss Shyness Scaleを用いた研究では，例えば，Crozier, 2005），本研究でも，同様の結果が得られた。

Table 3 特性シャイネス尺度・行動抑制尺度・対人不安尺度の平均得点

| 尺度      | 集団 | n   | 平均点   | 標準偏差  | 性差による得点平均の差の検定 |      |      |                    |   |       |
|---------|----|-----|-------|-------|----------------|------|------|--------------------|---|-------|
|         |    |     |       |       | df             | t 値  | 有意確率 | 差の95%信頼性区間 (下限-上限) |   |       |
| シャイネス尺度 | 全体 | 185 | 42.66 | 11.78 | 177.1          | .314 | n.s. | -1.675             | - | 5.179 |
|         | 男性 | 94  | 43.52 | 10.87 |                |      |      |                    |   |       |
|         | 女性 | 91  | 41.77 | 12.65 |                |      |      |                    |   |       |
| 行動抑制尺度  | 全体 | 187 | 17.81 | 6.13  | 177.9          | .874 | n.s. | -.990              | - | 2.504 |
|         | 男性 | 95  | 18.20 | 5.61  |                |      |      |                    |   |       |
|         | 女性 | 92  | 17.41 | 6.65  |                |      |      |                    |   |       |
| 対人不安尺度  | 全体 | 187 | 19.46 | 5.48  | 185            | .822 | n.s. | -.924              | - | 2.245 |
|         | 男性 | 96  | 19.78 | 5.41  |                |      |      |                    |   |       |
|         | 女性 | 91  | 19.12 | 5.57  |                |      |      |                    |   |       |

Table 4 自分をシャイだと思う/思わないこととシャイネス尺度得点との関連

| 尺度      | 自己報告<br>(シャイだと) | n   | 平均得点 | 標準偏差 | 「思う」群と「思わない」群の得点平均の差の検定 |       |        |                    |   |       |
|---------|-----------------|-----|------|------|-------------------------|-------|--------|--------------------|---|-------|
|         |                 |     |      |      | df                      | t 値   | 有意確率   | 差の95%信頼性区間 (下限-上限) |   |       |
| シャイネス尺度 | 思う              | 98  | 50.1 | 9.17 | 183                     | 12.17 | p<.001 | 13.19              | - | 18.29 |
|         | 思わない            | 87  | 34.3 | 8.33 |                         |       |        |                    |   |       |
| 行動抑制尺度  | 思う              | 99  | 21.1 | 5.25 | 185                     | 9.39  | p<.001 | 5.50               | - | 8.43  |
|         | 思わない            | 88  | 14.1 | 4.84 |                         |       |        |                    |   |       |
| 対人不安尺度  | 思う              | 100 | 22.6 | 4.65 | 185                     | 10.36 | p<.001 | 5.37               | - | 7.91  |
|         | 思わない            | 87  | 15.9 | 4.03 |                         |       |        |                    |   |       |

自分をシャイだと「思う」群と「思わない」群の特性シャイネス尺度、行動抑制尺度、対人不安尺度の平均点と標準偏差をTable 4に示す。t検定を行った結果、特性シャイネス尺度得点、行動抑制尺度得点、対人不安尺度得点とも、自分がシャイだと「思う」群の平均得点が高く、いずれも0.1%水準で有意であった (Table 4)。この結果から、その人がシャイであるかどうかを判断する際、「自分をシャイだと思う」という自己報告を利用することの有用性が示されたと考えられる。

## 2. シャイだと思ふこと、特性シャイネスとシャイなため困った経験の関係

シャイなため困った経験について、「現在も困っている」者が13.6%、「これまで困った経験がある」者が48.9%、「困った経験はない」者が37.5%いた (Table 5)。シャイなため「現在」或いは「これまで」困った経験を有する者が6割以上存在し、そのうち「現在」も困っている者が1割以上いることが示

された。χ<sup>2</sup>検定を行った結果、出現頻度に性差は認められなかった (χ<sup>2</sup>(2)=224, n.s.; df ≥ 2の効果量Cramerのv=.035, ±1.96を超える調整済み残差の項なし)。

また、自分をシャイだと思ふ/思わないことと、シャイなため困った経験との関連については、自分をシャイだと思ふ者101名のうち、23.8% (24名) の者が「現在も困っている」と回答し、69.3% (70名) の者が「これまで困った経験がある」と回答している一方、シャイだと思わない者の74.7% (62名) は、「困った経験はない」と回答していた (Table 6)。χ<sup>2</sup>検定を行った結果、自分をシャイだと思ふかどうかということと困った経験の間に有意な差が認められた (χ<sup>2</sup>(2)=91.897, p<.001; Cramerのv=.707)。残差分析の結果、「シャイだと思ふ」者が、「シャイだと思わない者」よりも「現在」(調整済み残差4.4) 困っている、或いは、「これまで」(調整済み残差6.1) 困った経験を有すること、「シャイだと思わない者」が「困った経験がな

**Table 5** シャイなため困った経験の有無 n=184

|    | 現在も困っている  | 困った経験あり   | 困った経験なし   | 合計          |
|----|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 男性 | 14(14.7%) | 46(48.4%) | 35(36.8%) | 95(100.0%)  |
| 女性 | 11(12.4%) | 44(49.4%) | 34(38.2%) | 89(100.0%)  |
| 合計 | 25(13.6%) | 90(48.9%) | 69(37.5%) | 184(100.0%) |

**Table 6** 自分をシャイだと思うことと困った経験の関連 n=184

|           | 現在も困っている   | 困った経験あり    | 困った経験なし    | 合計           |
|-----------|------------|------------|------------|--------------|
| シャイだと思う   | 24 (23.8%) | 70 (69.3%) | 7 ( 6.9%)  | 101 (100.0%) |
| シャイだと思わない | 1 ( 1.2%)  | 20 (24.1%) | 62 (74.7%) | 83 (100.0%)  |
| 合計        | 25 (13.6%) | 90 (48.9%) | 69 (37.5%) | 184 (100.0%) |

**Table 7** シャイなため困った経験とシャイネス尺度得点との関連

| 尺度      | 困った経験   | n  | 得点平均 | 標準偏差 |
|---------|---------|----|------|------|
| シャイネス尺度 | 現在困っている | 24 | 54.7 | 9.22 |
|         | 経験あり    | 87 | 46.2 | 9.75 |
|         | 経験なし    | 69 | 34.6 | 9.22 |
| 行動抑制尺度  | 現在困っている | 24 | 23.5 | 5.10 |
|         | 経験あり    | 89 | 19.0 | 5.66 |
|         | 経験なし    | 69 | 14.5 | 5.19 |
| 対人不安尺度  | 現在困っている | 25 | 24.2 | 4.73 |
|         | 経験あり    | 88 | 21.1 | 4.60 |
|         | 経験なし    | 69 | 15.9 | 4.40 |

**Table 8** 「シャイなため困った経験」群間の分散分析の結果

| 尺度      | 平方和    | df | 平均平方   | F値    | 有意確率       | 多重比較の結果 |
|---------|--------|----|--------|-------|------------|---------|
| シャイネス尺度 | 9014.0 | 2  | 4507.0 | 50.14 | $p < .001$ | 1>2>3   |
| 行動抑制尺度  | 1668.3 | 2  | 834.1  | 28.48 | $p < .001$ | 1>2>3   |
| 対人不安尺度  | 1681.9 | 2  | 841.0  | 40.74 | $p < .001$ | 1>2>3   |

注) 多重比較の数字は、1:現在困っている、2:困った経験がある、3:困った経験なし、を示す

**Table 9** 各尺度得点高群-低群ごとの「シャイなため困った経験」の分布と $\chi^2$ 検定の結果

| 尺度                  | 群       | 困った経験あり  | 現在困っている  | 困った経験なし  | $\chi^2$ 検定の結果                                  |
|---------------------|---------|----------|----------|----------|---|
| シャイネス尺度<br>(平均42.7) | 高群(>43) | 57( 3.6) | 22( 4.2) | 14(-6.6) | $\chi^2(2) = 49.263, p < .001$<br>CramerのV=.523 |
|                     | 低群(<42) | 30(-3.6) | 2(-4.2)  | 55( 6.6) |   |
| 行動抑制尺度<br>(平均17.8)  | 高群(>18) | 54( 2.1) | 22( 4.1) | 20(-5.0) | $\chi^2(2) = 34.460, p < .001$<br>CramerのV=.422 |
|                     | 低群(<17) | 35(-2.1) | 2(-4.1)  | 49( 5.0) |   |
| 対人不安尺度<br>(平均19.5)  | 高群(>20) | 56( 4.0) | 21( 3.8) | 11(-6.8) | $\chi^2(2) = 49.976, p < .001$<br>CramerのV=.524 |
|                     | 低群(<19) | 32(-4.0) | 4(-3.8)  | 58( 6.8) |   |

注) 群の欄の ( ) 内の数字は各尺度の得点、困った経験欄の ( ) 内の数字は調整済み残差、を表す

い」(調整済み残差9.4) ことが示された。

シャイなため「現在も困っている」群, 「これまで困った経験がある」群, 「困った経験はない」群のシャイネス尺度, 行動抑制尺度, 対人不安尺度の平均得点と標準偏差をTable 7に示す。いずれの尺度においても, 平均得点は「現在も困っている」群が最も高く, 「困った経験はない」群が最も低い。一元配置分

散分析の結果, 平均得点間に有意差が認められ (Table 8), 多重比較の結果, いずれの尺度においても, シャイなため「現在も困っている」群, 「これまで困った経験がある」群, 「困った経験はない」群の各群間で有意差が認められた (Table 8)。そこで, 改めて, 各尺度得点の平均点より高得点者を高群, 平均点より低得点者を低群とし, 各尺度得点にお

ける高群-低群の「シャイなため困った経験」ごとの分布を求め、 $\chi^2$ 検定を行った結果、いずれの尺度においても有意な差が認められ、残差分析の結果、高群が、シャイネス、行動抑制、対人不安に関して「現在も困っている」(調整済み残差は順に4.2, 4.1, 3.8), 「これまで困った経験がある」(調整済み残差は順に3.6, 2.1, 4.0) こと、低群が、「困った経験はない」(調整済み残差は順に6.6, 5.0, 6.8) ことが示された (Table 9). これらの結果から、特性シャイネス得点の高いシャイな人は、シャイなため困った経験をしやすいことが考えられる。自分をシャイだと思ふ人は特性シャイネス、行動抑制、対人不安のいずれの尺度得点も高いことと関連していると考えられるが、尺度得点を用いた分析においても、自己報告と同様の結果が得られた。

### 3. 特性シャイネス、行動抑制、対人不安とビッグ・ファイブとの関連

まず、FFPQ-50の50項目について、逆転項目の処理を行い、確認的な意味で因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。固有値スクリープロットの減衰状況から、この尺度が仮定している5因子構造であることが確認された。因子負荷量が0.4未満の項目を削除して、因子分析を再度行った。この基準で行った結果、第5因子が4項目となったため、項目数を確保するため、第5因子のみ、因子負荷量0.37以上の2項目を追加した。他の因子にも、0.37以上の因子負荷量を持つ項目が1つあったが、別の因子にも高い因子負荷量を示し、その差が0.1未満だったので、その項目については、追加することはしなかった。結果をTable 10に示す。第1因子は、「ゆううつになりやすい」、「自分がみじめな人間に思える」、「陽気になったり陰気になったり気分が変わりやすい」など、すべてFFPQ-50の第1因子(情動性)を構成する項目からなっており、「情動性」因子と命名できると考えられた。第2因子は、「考えること

は面白い」、「自分の感じたことを大切にすゝる」、「イメージがあふれ出てくる」など、すべてFFPQ-50の第5因子(遊戯性)を構成する項目からなっており、「遊戯性」因子と命名できると考えられた。第3因子は、「大勢でわいわい騒ぐのが好きである」、「にぎやかな所が好きである」、「人に指示を与えるような立場に立つことが多い」、「もの静かである」など、すべてFFPQ-50の第2因子(外向性)を構成する項目からなっており、「外向性」因子と命名できると考えられた。第4因子は、「あまりきっちりした人間ではない」、「責任感が乏しいといわれることがある」、「仕事を投げやりにしてしまうことがある」など、すべてFFPQ-50の第3因子(統制性)を構成する項目からなっており、「統制性」因子と命名できると考えられた。第5因子は、「誰に対しても優しく親切にふるまうようにしている」、「人には暖かく友好的に接している」、「どうしても好きになれない人がたくさんいる」など、すべてFFPQ-50の第4因子(愛着性)を構成する項目からなっており、「愛着性」因子と命名できると考えられた。 $\alpha$ 係数は、第1因子が.872、第2因子が.756、第3因子が.797、第4因子が.763、第5因子が.717であり、内的整合性は十分に保たれている(36項目全体の $\alpha$ 係数は.720)。また、今回得られた5因子を構成する項目が、すべて、FFPQ-50の5因子を構成する項目と重複していることから、一定の妥当性も担保されていると考えられた。尚、以下の分析では、これら5つの因子を、FFPQ-50の因子構成に準じて、第1因子「情動性」、第2因子「外向性」、第3因子「統制性」、第4因子「愛着性」、第5因子「遊戯性」として扱うこととする。各因子間の相関を調べると、情動性と外向性、統制性の間に弱い負の相関(それぞれ $r=-.189$ ,  $r=-.207$ , いずれも $p<.01$ )が、遊戯性と外向性、愛着性に弱い相関(それぞれ $r=.288$ ,  $r=.199$ , いずれも $p<.01$ )が認められたが (Table 11)、いずれも弱い相関関係であり、



Table 10 FFPQ-50の因子分析の結果 (主因子法バリマックス回転)

| 項目                          | 第1因子  | 第2因子  | 第3因子  | 第4因子  | 第5因子  | 共通性  |
|-----------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 11ゆううつになりやすい                | .807  | -.067 | .089  | -.038 | -.081 | .693 |
| 12自分がみじめな人間に思える             | .789  | -.153 | -.045 | -.115 | .013  | .696 |
| 17陽気になったり陰気になったり気分が変わりやすい   | .765  | -.038 | .082  | -.132 | -.085 | .604 |
| 16自分には全然価値がないように思えることがある    | .682  | -.071 | -.088 | .047  | .089  | .470 |
| 13物事がうまくいかないのではないかとよく心配する   | .661  | -.246 | -.029 | -.178 | -.005 | .542 |
| 15見捨てられた感じがする               | .641  | -.111 | -.014 | -.210 | -.119 | .488 |
| 19明るいときと暗いときの気分の差が大きい       | .585  | .094  | .002  | -.010 | -.126 | .373 |
| 14小さなことにはよくよしない             | .428  | -.049 | -.094 | -.067 | -.105 | .211 |
| 53考えることは面白い                 | -.077 | .055  | .678  | .211  | .097  | .491 |
| 55自分の感じたことを大切にす             | -.112 | .173  | .669  | .048  | .104  | .684 |
| 54イメージがあふれ出てくる              | -.167 | .233  | .678  | -.078 | .056  | .709 |
| 58好奇心が強い                    | -.072 | .362  | .582  | .089  | .156  | .410 |
| 59感情豊かな人間である                | .011  | .316  | .517  | .101  | .257  | .510 |
| 52美や芸術にはあまり関心がない            | -.083 | -.178 | .512  | .064  | .093  | .339 |
| 51芸術作品に接すると鳥肌が立ち興奮を覚えることがある | -.124 | -.021 | .484  | -.017 | .175  | .321 |
| 50別世界に行ってみたい                | .163  | .071  | .460  | -.142 | -.053 | .310 |
| 21大勢でわいわい騒ぐのが好きである          | -.133 | .614  | -.024 | -.153 | -.083 | .555 |
| 23にぎやかな所が好きである              | -.191 | .533  | .040  | -.213 | -.063 | .536 |
| 27人に指示を与えるような立場に立つことが多い     | -.037 | .573  | .191  | .280  | -.156 | .526 |
| 25もの静かである                   | -.091 | .544  | .004  | -.015 | .290  | .527 |
| 26人の上に立つことが多い               | -.062 | .562  | .200  | .246  | -.012 | .474 |
| 22地味で目立つことはない               | -.146 | .511  | -.102 | .190  | .145  | .536 |
| 24大勢の人の中にいるのが好きである          | .026  | .446  | -.011 | -.121 | .068  | .256 |
| 28じっとしているのが嫌いである            | .036  | .411  | .179  | .072  | -.058 | .228 |
| 31あまりきっちり人間ではない             | -.131 | -.089 | -.178 | .673  | -.020 | .458 |
| 35責任感が乏しいといわれることがある         | -.069 | .252  | -.014 | .685  | -.098 | .540 |
| 32仕事を投げやりにしてしまうことがある        | -.193 | .236  | -.166 | .576  | -.049 | .418 |
| 33よく考えてから行動する               | -.043 | -.149 | .014  | .544  | .127  | .351 |
| 34仕事は計画的にするようにしている          | -.063 | -.061 | .051  | .513  | -.021 | .269 |
| 38几帳面である                    | -.032 | -.017 | .030  | .521  | .079  | .301 |
| 41誰に対しても優しく親切にふるまうようにしている   | .031  | .205  | .189  | .094  | .742  | .633 |
| 42人には暖かく友好的に接している           | -.022 | .239  | .145  | .030  | .753  | .662 |
| 47どうしても好きになれない人がたくさんいる      | -.161 | -.019 | .112  | -.086 | .562  | .406 |
| 43人の気持ちを積極的に理解しようとは思わない     | -.107 | -.009 | -.096 | .225  | .468  | .247 |
| 48出会った人はたいがい好きになる           | .056  | .202  | .172  | -.049 | .387  | .228 |
| 40人を馬鹿にしているといわれることがある       | -.052 | -.058 | .064  | .081  | .371  | .144 |
| 固有値                         | 3.94  | 3.10  | 3.05  | 2.66  | 2.39  |      |
| 寄与率(%)                      | 3.94  | 3.10  | 3.05  | 2.66  | 2.39  |      |
| 累積寄与率(%)                    | 10.93 | 19.53 | 28.00 | 35.37 | 42.01 |      |
| 各項目群の信頼性係数( $\alpha$ )      | .872  | .756  | .797  | .763  | .717  |      |

\*項目先頭の数字は、5因子のうちの 1：情動性、2：外向性、3：統制性、4：愛着性、5：遊戯性を表す

5 因子それぞれに、ある程度の独立性が認められると考えてよいと思われる。そこで、これら5 因子の項目からなる尺度を、本研究における、5 因子性格特性(ビッグ・ファイブ)を測定する尺度とし、情動性尺度(項目数8)、外向性尺度(項目数8)、統制性尺度(項目数6)、愛着性尺度(項目数6)、遊戯性尺度(項目数8)として利用することとした。各尺度の平均得点をTable 12に示す。性差を検討したところ、情動性(心配性、抑うつ、自己批判、気分変動)と愛着性(温厚、信頼、共感、他者尊重)に有意差が認められ(順に、 $t(185)=-3.110$ ,  $t(187)=-3.121$ , ともに $p<.01$ ), いずれも女性の得点の方が高かった (Table 12)。

次に、特性シャイネス得点を従属変数、性格特性(ビッグ・ファイブ)を測定する5つ

Table 11 性格特性 5 因子間の相関

| 性格特性 | 情動性 | 外向性     | 統制性     | 愛着性   | 遊戯性     |
|------|-----|---------|---------|-------|---------|
| 情動性  |     | -.189** | -.207** | -.137 | -.102   |
| 外向性  |     |         | .088    | .140  | .288**  |
| 統制性  |     |         |         | .005  | -.002   |
| 愛着性  |     |         |         |       | -.199** |
| 遊戯性  |     |         |         |       |         |

\*\* $p<.01$

の尺度を独立変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。従属変数の特性シャイネス得点には性差が認められないことから、5 因子性格特性(ビッグ・ファイブ)を測定する5 尺度の得点も、男女込みの得点を用いて分析した。その結果、特性シャイネスは、情動性、外向性、愛着性の3つの特性で(順に $\beta=.208$ ,  $\beta=-.509$ ,  $\beta=-.175$ , いずれも $p<.01$ ), 行動抑制は、外向性と愛着性の2つの特性で(順に $\beta=-.490$ ,  $\beta=-.241$ , いずれも $p<.01$ ), 対人不安は、情動性と外向性の2つの特性で(順に $\beta=.261$ ,  $\beta=-.382$ , いずれも $p<.01$ ) 説明できると考えられる結果が得られた (Table 13,

Table13 重回帰分析によるビッグ・ファイブと特性シャイネス、行動抑制、対人不安の関係

|                | 特性シャイネス | 行動抑制    | 対人不安    |
|----------------|---------|---------|---------|
| 情動性            | .208**  | .099    | .261**  |
| 外向性            | -.509** | -.409** | -.382** |
| 統制性            | -.058   | -.009   | -.068   |
| 愛着性            | -.175** | -.241** | -.063   |
| 遊戯性            | -.106   | -.118   | -.096   |
| 決定係数 ( $R^2$ ) | .476**  | .427**  | .321**  |
| $F$            | 31.95   | 26.49   | 16.77   |
| $df$           | (5,176) | (5,178) | (5,177) |

\*\* $p<.01$

Table 12 性格特性(ビッグ・ファイブ)に関する5 尺度の得点平均

| 尺度    | 集団 | n   | 平均点   | 標準偏差  | 性差による得点平均の差の検定 |        |         |                   |
|-------|----|-----|-------|-------|----------------|--------|---------|-------------------|
|       |    |     |       |       | $df$           | $t$ 値  | 有意確率    | 差の95%信頼性区間(下限-上限) |
| 情動性尺度 | 全体 | 187 | 22.97 | 6.349 |                |        |         |                   |
|       | 男性 | 96  | 21.59 | 5.932 | 185            | -3.110 | $p<.01$ | -4.615 - -1.033   |
|       | 女性 | 91  | 24.42 | 6.483 |                |        |         |                   |
| 外向性尺度 | 全体 | 187 | 28.73 | 5.297 |                |        |         |                   |
|       | 男性 | 97  | 28.69 | 4.678 | 169.3          | -.097  | $n.s.$  | -1.624 - -1.472   |
|       | 女性 | 90  | 28.77 | 5.919 |                |        |         |                   |
| 統制性尺度 | 全体 | 189 | 19.69 | 4.233 |                |        |         |                   |
|       | 男性 | 97  | 19.27 | 4.259 | 187            | -1.422 | $n.s.$  | -2.085 - .399     |
|       | 女性 | 92  | 20.14 | 4.182 |                |        |         |                   |
| 愛着性尺度 | 全体 | 189 | 16.11 | 2.184 |                |        |         |                   |
|       | 男性 | 97  | 15.64 | 2.147 | 187            | -3.121 | $p<.01$ | -1.582 - -3.57    |
|       | 女性 | 92  | 16.11 | 2.184 |                |        |         |                   |
| 遊戯性尺度 | 全体 | 189 | 28.68 | 5.224 |                |        |         |                   |
|       | 男性 | 97  | 28.44 | 5.538 | 187            | -.631  | $n.s.$  | -1.983 - 1.022    |
|       | 女性 | 92  | 28.92 | 4.891 |                |        |         |                   |

Fig.1, Fig.2, Fig.3). 標準回帰係数 ( $\beta$ ) の符合を考慮すれば, 行動抑制 (の見える人) は, 外向性, 愛着性 (協調性) があまり表現されないタイプとして (Fig.2), 対人不安 (の見える人) は, 外向性が表現されにくく, 情動性 (情緒不安定性) が表現されやすいタイプとして (Fig.3), 特性シャイネス (シャイな人) は, それらの特性を兼ね備えた, 外向性, 愛着性 (協調性) を表現しにくく, 情動性 (情緒不安定性) を表現しやすいタイプの人として説明できると考えられる (Fig.1). このように, 特性シャイネス, 及び, 行動抑制, 対人不安には, いずれも, 外向性が共通した説明変数となっており, それに加えて, 特性シャイネスと行動抑制には愛着性が, 特性シャイネスと対人不安には情動性が共通した説明変数となっている. 行動抑制を説明する外向性と愛着性, 対人不安を説明する外向性と情動性を合わせた外向性と愛着性, 情動性で特性シャイネスを説明できるという結果 (Fig.1, Fig.2, Fig.3) は, 行動抑制と対人不安が特性シャイネスの主要な要素であるという仮定を反映していると考えてよいであろう.

藤島ら (2005) は, 外向性の要素特性として, 活動, 支配, 群居, 興奮追及, 注意獲得の5つを挙げており, 本研究で利用した外向性尺度も, それらの要素と関連した「じっとしているのが嫌いである」(活動), 「人に指示を与えるような立場に立つことが多い」(支配), 「大勢でわいわい騒ぐのが好きである」(群居), 「にぎやかなところが好きである」(興奮追及), 「地味で目立つことはない」(注意獲得) といった項目からなっている. 外向性が負の符合となっていることと考え合わせると, シャイな人, 行動抑制のみられる人, 対人不安のみられる人は, いずれも, 活動的でなく, 支配的でない, 群れたがらず, 騒ぎたがらず, 目立ちたくない, といったタイプの人として説明できるといえよう. 特性シャイネス, 行動抑制, 対人不安とも, 標準偏回

帰係数 ( $\beta$ ) の値は, 外向性が最も大きいことから (Table 13), シャイな人, 行動抑制や対人不安のみられる人は, 活動的でなく, 支配的でない, 群れたがらず, 騒ぎたがらず, 目立ちたくない, といった外向的でないという要素特性で, ある程度説明できるタイプの人といえるだろう.

それに加えて, 行動抑制のみられる人は, 愛着性をあまり表現しない人と考えられる. 今回, 利用した愛着性尺度には, 温厚, 信頼, 共感, 他者尊重の4つの要素特性が含まれている. FFPQ-50には, 愛着性尺度の要素特性として, もう1つ, 「協調」が含まれるが, 本研究における愛着性尺度作成の過程で, 「協調」に関する2項目 (「人情深いほうだと思う」, 「気配りをするほうである」) が削除され, 温厚以下4つの要素特性を含む尺度となった. 愛着性尺度を構成する項目は, 「人に

Fig.1 ビッグ・ファイブと特性シャイネスの関係

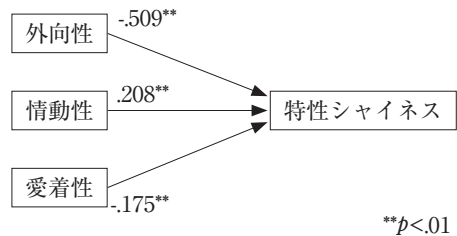


Fig.2 ビッグ・ファイブと行動抑制の関係

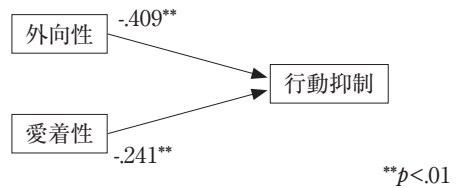
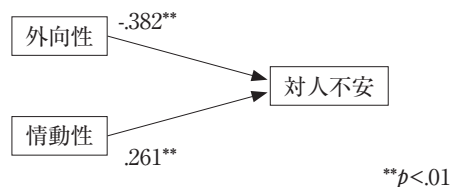


Fig.3 ビッグ・ファイブと対人不安の関係



は暖かく友好的に接している」(温厚)、「誰に対しても優しく親切にふるまうようにしている」(他者尊重)、「どうしても好きになれない人がたくさんいる」(信頼;逆転項目)、「人の気持ちを積極的に理解しようとは思わない」(共感)、「出会った人はたいがい好きになる」(信頼)、「人を馬鹿にしているといわれることがある」(他者尊重;逆転項目)というもので、「協調」の要素特性が抜けたとはいえ、全体的には、相手を尊重しながら、誰とでも仲良くしていこうとする、積極的、友好的な対人関係の持ち方や対人行動の実際を反映したものと考えられる。行動抑制に対して、愛着性が弱い負の影響力を持つことを考え合わせると、行動抑制(の见られる人)は、友好的な対人関係を形成することに対して消極的であったり、実際に、うまく対応できていないといった行動面の特徴を持つこと(人)として説明できるといえよう。

一方、対人不安は、外向性をあまり表現しないことに加えて、情動性を表現しやすい人として説明できる。今回、利用した情動性尺度には、心配性、抑うつ、自己批判、気分変動の4つの要素特性が含まれている。FFPQ-50には、情動性尺度の要素特性として、もう1つ、「緊張」が含まれるが、本研究における情動性尺度作成の過程で、「緊張」に関する2項目(「よく緊張する」,「緊張してふるえるようなことはない;逆転項目」)が削除され、心配性以下4つの要素特性を含む尺度となった。情動性尺度の項目は、「ゆううつになりやすい」(抑うつ)、「自分のみじめな人間に思える」(自己批判)、「陽気になったり陰気になったり気分が変わりやすい」(気分変動)、「物事がうまくいかないのではないかとよく心配する」(心配性)、「自分には全然価値がないように思えることがある」(自己批判)、「見捨てられた感じがする」(抑うつ)、「明るいとときと暗いときの気分の差が大きい」(気分変動)、「小さなことにはくよくよししない」(心配性;逆転項目)というものである。

対人不安(の见られる人)は、くよくよししたり、心配したり、ゆううつになったりといった否定的な感情を経験しやすい、情緒が不安定であるといったこととともに、自分のみじめである、価値がないといった自己否定的な認知をしやすいといった内面的な特徴で説明できると考えられる。

特性シャイネス(シャイな人)は、これまで述べてきた行動抑制と対人不安の両方の特徴から説明でき、外向性や愛着性が表現されにくく、情動性が表現されやすいという特徴で説明できよう。

## 5. 総合的考察と今後の課題

本研究では、自己報告(「自分はシャイだと思う」)を利用して、その人がシャイ(な人)であると判断してよいか、また、自分をシャイであると思っている人、及び、特性シャイネス得点の高い人は、実際に、シャイであるため困っているのかということをも明らかにするとともに、ビッグ・ファイブ(Big Five)の枠組みから、特性シャイネス(シャイな人)がどのように説明されるのかということを検討することを目的として行われた。

その結果、自分をシャイだと思う人は、特性シャイネス尺度得点が有意に高く、自分をシャイだと思う人は、実際にシャイであるということも支持する結果が得られた。また、自分をシャイだと思っていたり、特性シャイネス尺度得点の高い人は、シャイなため、困った経験を有することが明らかになった。多くの人がシャイネスを喚起されるが、その中でも、自分をシャイだと思っている人、特性シャイネス尺度得点の高い人は、シャイなため困りやすいと考えられる。いずれについても、性差は認められなかった。本研究では、困った経験の内容までは明らかにできなかったが、今後、シャイな教師が、具体的に、どのような困った経験をしているのかを明らかにしながら、シャイなため困っている教師の支援策を検討していきたい。

特性シャイネスには、行動抑制と対人不安の要素があることが確認され、特性シャイネス、行動抑制、対人不安をビッグ・ファイブの観点から検討すると、いずれも、外向性を表現しにくい特徴を持つが、行動抑制は、それに加えて、対人行動的側面と関連した愛着性（協調性）を表現しにくいタイプ、対人不安は、情動的な側面と関連した情動性（情緒不安定性）を表現しやすいタイプとして説明できると考えられた。特性シャイネスは、行動抑制及び対人不安の両方の特徴から説明できること、すなわち、外向性、愛着性（協調性）を表現しにくく、情動性（情緒不安定性）を表現しやすいタイプとして説明できると考えられる。このことを、より具体的に表現すれば、シャイな人とは、活動的でなく、支配的でない、群れたがらず、騒ぎたがらず、目立ちたくない人、友好的な対人関係形成に消極的であったり、うまく対応できていない人、くよくよしたり、心配したり、ゆううつになったりといった否定的な感情を経験しやすく、情緒が不安定であるとともに、自分は価値がないといった自己否定的な認知をしやすい人ということになる。今回、外向性、対人不安、情動性の3つで特性シャイネス（シャイな人）が説明された。情動性に、認知的な要素（自己批判）も含まれるとすれば、特性シャイネスが、認知（自己批判）、行動（消極性、等）、情動（心配、等）の3要素で説明されることになる。この結果は、シャイネスを、認知（例えば、自己否定的認知）、行動（例えば、抑制的行動）、情動（例えば、不安）の3要素で理解しようとする3要素モデル（three-component model：例えば、相川, 2009；Cheek & Watson, 1989；鈴木ら, 1997；van der Molen, 1990）とも対応的であることが示唆されたと考えてよいであろう。今後、こうした特徴を有する教師が、教職を遂行する場面で、実際にどのようなことを感じ、考え、どのように振るまっているのか、また、教師としてどのように成長していくのかとい

うことを明らかにしていきたいと考えている。

### 〔謝辞〕

本研究を進めるに当たり、特性シャイネス尺度の利用をご快諾下さった筑波大学の相川充先生、FFPQ-50の利用をご快諾下さった甲南女子大学の藤島寛先生、山田尚子先生、並びに、調査に協力してくれた学生のみなさんに感謝致します。

### 〔引用文献〕

- 相川充（1991）特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究。心理学研究, 62(3), 149-155.
- 相川充（2009）シャイネス。社会心理学事典, 丸善:東京, 116-117.
- Alm, C. & Frodi, A. (2008) Tales from the shy: Interviews with self- and peer-rated, shy And non-shy individuals concerning their thoughts, emotions, and behaviors in social situations. *Qualitative Research in Psychology*, 5(2), 127-153.
- Bratko, D., Vukosav, Z., Zarevski, P. & Vrani, A. (2002) The relations of shyness and assertiveness traits with the dimensions of the five factor model in adolescence. *Review of Psychology*, 9(1-2), 17-23.
- Bruch, M.A., Gorsky, J.M., Collins, T.M. & Berger, P.A. (1989) Shyness and sociability reexamined: A multicomponent analysis. *Journal of Personality & Social Psychology*, 57, 904-915.
- Buss, A. H. (1980) *Self-Consciousness and Social Anxiety*. W. H.Freeman and Company: San Fransisco.
- Cheek, M. J. & Buss, A. H. (1981) Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Cheek, M.J. & Melchior, L. A. (1990) Shyness, selfesteem, and self consciousness. In Leitenberg, H. (Ed.), *Handbook of Social and Evaluation Anxiety*, Plenum Press: New

- York,47-82.
- Cheek, M. J. & Watson, K.A. (1989) The definition of shyness: Psychological imperialism or construct validity? *Journal of Social Behavior & Personality*, 4(1), 85-95.
- Crozier, W.R. (1979) Shyness as a dimension of personality. *British Journal of Social Psychology*, 18, 121-128.
- Crozier, W.R. (1990) Introduction. In Crozier, W.R.(Ed.) *Shyness and embarrassment*. Cambridge University Press: Cambridge, 1.
- Crozier, W.R. (2005) Measuring shyness: Analysis of the Revised Cheek and Buss Shyness scale. *Personality and Individual Differences*, 38, 1947-1956.
- Eisenberg, N. Fabes, R.A., & Murphy, B.C. (1995) Relations of shyness and low sociability to regulation and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 505-517.
- Fatis, M. (1983) Degree of shyness and self-reported psychological, behavioral, and cognitive reactions. *Psychological Reports*, 52, 351-354.
- 藤島寛・山田尚子・辻平治郎 (2005) 5因子性格検査短縮版 (FFPQ-50) の作成. パーソナリティ研究, 13(2), 231-241.
- Gerbino, M., Cannistraro, S., & Steca, B. (2000) The measurement of shyness and sociability in adolescence. *Ricerche di Psicologia*, 24(1), 7-21.
- 林智幸 (2002) 発達の視点からのビッグ・ファイブ研究の展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 51, 271-277.
- Hill, G.J. (1989) An Unwillingness to act: Behavioral appropriateness, situational constraint, and self-efficacy in shyness. *Journal of Personality*, 57, 871-890.
- Ishiyama, F. I. (1984) Shyness: Anxious social sensitivity and self-isolating tendency. *Adolescence*, 19(76), 903-911.
- 石田靖彦 (2003) 友人関係の形成過程におけるシャイネスの影響 —大学新入生の縦断的研究— 対人社会心理学研究, 3, 15-22.
- Jones, W. H., Briggs, S. R., & Smith, T.G. (1986) Shyness: Conceptualization and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 629-639.
- Jones, W. H. & Russell, D. (1982) The social reticence scale: An objective instrument to measure shyness. *Journal of Personality Assessment*, 46, 629-631.
- 風間雅江 (2009) 大学生におけるコミュニケーション手段の選好とシャイネスの関係. 人間福祉研究, 12, 51-60.
- 岸恵理子・藤田尚文 (2004) 性格特性5因子論 (FFM) とエゴグラム, 親子関係, 社会的スキルの関係について. 高知大学教育学部研究報告, 64, 103-123.
- 岸本陽一 (1999) シャイネスの3要素理論とサブタイプ. 行動科学, 38 (1・2), 81-87.
- 岸本陽一 (2000) シャイネス経験の頻度と強度が生理的, 認知的反応および行動に及ぼす影響. 近畿大学教養部紀要, 31(3), 1-15.
- Leary, M.R. (1986) Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J.M. Cheek, & S.R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. Plenum Press: New York, 27-38.
- 三輪雅子・三浦正江・上里一郎 (1999) 大学生のシャイネスと信頼感, 及び精神的健康の関連性の検討. ヒューマンサイエンスリサーチ, 8, 121-137.
- 大野木裕明 (2004) 主要5因子性格検査3種間の相関的資料. パーソナリティ研究, 12(2), 82-89.
- Pilkonis, P. A. (1977) The behavioral consequences of shyness. *Journal of Personality*, 45, 596-611.
- 菅原健介 (1998) シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向. 性格心理学研究, 7(1), 22-32.
- 鈴木裕子・山口創・根建金男 (1997) シャイネス尺度 (Waseda Shyness Scale) の作成とその信頼性・妥当性の検討. カウンセリング研究, 30, 245-254.
- 高柳真人 (2006a) シャイな教師の対人行動円滑化に関する一考察. 高知大学教育実践研

- 究, 20, 67-78.
- 高柳真人 (2006b) シャイな教師に対する同僚教師の認知と評価に関する研究. 高知大学教育学部研究報告, 66, 39-48.
- 高柳真人・田上不二夫・藤生英行 (1998) 教師のシャイネスに対する評価と対人行動の関連について. カウンセリング研究, 31(1), 27-33.
- 高柳真人・田上不二夫・藤生英行 (2005) シャイな教師がシャイネスを喚起される学校場面に関する研究. カウンセリング研究, 38(2), 109-118.
- van der Molen, H. T. (1990) A definition of shyness and its implications for clinical practice. In Crozier, W. R.(Ed.), *Shyness and embarrassment: Perspectives from social psychology*. Cambridge University Press :Cambridge. 255-285.
- ジンバルドー: 木村駿・小川和彦訳 (1982) シャイネス I 内気な人々. シャイネス II 内気を克服するために. 勁草書房: 東京. (Zimbardo, P.G. (1977) *Shyness: What it is, what to do about it*. Addison-Wesley: Massachusetts.)